

<p>特定非営利活動法人 赤煉瓦倶楽部舞鶴</p>		<p>NPO法人 赤煉瓦倶楽部舞鶴 会報          発行人/理事長 馬場 英男          〒625-0036 舞鶴市浜 247 番地          (志摩機械三条ビル3階)          TEL/090-3281-7539 FAX/0773-63-9764          E-mail brick@iris.eonet.ne.jp</p>	
<p>会報 87号 平成26年1月1日</p>		<p>「NPO法人赤煉瓦倶楽部舞鶴」ホームページ <a href="http://www.redbrick.jp/">http://www.redbrick.jp/</a></p>	

**謹賀新年 今年もどうかよろしくお願ひします**

**目次**

1 赤煉瓦ネットワーク関門大会 報告	4 東日本大震災支援報告
2 「謎の英国人ウォートルスの足跡をたどる」	5 編集後記
3 廃校日丸山小学校の保存活用の取り組み	

**1. 赤煉瓦ネットワーク関門大会 報告** **理事長 馬場 英男** (会員No.8)

平成25年11月16日(土)・17日(日)の二日間、第23回目の赤煉瓦ネットワーク全国大会が関門大会として、北九州市の門司区と山口県下関市合同の大会が開催されました。舞鶴から4名の理事が参加しましたので以下報告します。

初日16日は、JR門司駅近くの「門司赤煉瓦プレイス」で開催されました。基調講演は、東京大学名誉教授・青山学院大学教授・博物館明治村館長の鈴木博之氏により「赤煉瓦はなぜ日本人を魅了してきたか?」では、ヨーロッパの建築様式からひも解く煉瓦の魅力など講演。続き、開催地紹介では、門司麦酒煉瓦館長の市原猛志氏が「門司大里赤煉瓦建築群の魅力について」、また、九州大学大学院教授の藤原恵洋氏が「下関・唐戸地区の近代建築」で現在保存修理工事中の重要文化財旧英国領事館について詳しく解説しました。

続き、赤煉瓦倶楽部舞鶴及び赤煉瓦倶楽部半田が事例発表を行い、休憩をはさみ、赤煉瓦写真コンテストの表彰式が行われました。

また、今回、主催者の強い希望で開催された「日本赤煉瓦建築番付公開編成会議・関門場所」でしたが、事務局の発表にも関わらず会場から意見・異論が寄せられ、行司役の藤原恵洋教授に一任することでひとまず千秋楽を終えました。

大会閉会后、交流懇親会が盛大に開催され、参加団体参加者の自己紹介や恒例となった内藤恒平事務局長のご当地ソングで盛り上がりました。次回開催地に決定した富岡市に横断幕が引き渡されました。



大会会場の門司赤煉瓦プレイス



大会の様様 内藤事務局長開会挨拶



下関市 旧英国領事館 (中央・改修工事中)

**2. 「謎の英国人ウォートルスの足跡をたどる」** **理事 小野 章** (会員No.9 赤れんが博物館勤務)

**謎多き英国人**

舞鶴市立赤れんが博物館では、銀座煉瓦街の煉瓦塊展示、小菅集治監の煉瓦製造解説、大阪造幣寮の煉瓦展示、「英国耐火煉瓦の同窓会」展、旧大阪府庁の煉瓦展示などトーマス・ジェームズ・ウォートルス関連の展示を従来から行っておりま

す。

しかしながら、ウォートルス本人の詳細については、長く不明な部分が多いままでした。すなわち、幕末から明治初期まで日本に滞在し、薩摩藩の白砂糖工場、長崎小菅巻場ドック、大阪造幣寮、銀座煉瓦街、東京小菅の日本最初のホフマン窯、竹橋陣営兵舎など諸施設の設計・建設に関わったことは判明しています。この数年公になった資料などにより、来日前・離日後の経歴が明らかになってきたので、さらに郷里の町などへ照会し、彼の出生から逝去までの経過をたどりました。

#### トーマス・ウォートルスの日本での事跡

幕末にグラバー商会に雇われ香港経由で来日、明治10年の離日まで多数の洋式建築の建設に関与した。直接・間接に関わった建物はかなり判っていますが、出生地や離日後の足どりの詳細は不明でした。

彼が関わったとされる建物は、薩摩藩奄美大島の白砂糖製造工場（4箇所）、旧鹿児島紡績技術師館、旧小菅巻場ドック、高島炭鉱、大阪造幣寮、大蔵省辰ノ口分析所、竹橋陣営兵舎、陸軍教導団、皇居山里の鉄製吊橋、銀座煉瓦街、英国公使館、旧大阪府庁舎などですが、特記すべきは、銀座煉瓦街に供給するため小菅の煉瓦会社「盛煉社」に日本初のホフマン窯3基を建設したとされることです。また、東京蠣殻町に「有恒社」という日本初の製紙工場（明治5年創業）や品川硝子製造所の輪窯の設計・施工に関与しました。

なお、弟のアルバートは、1879年（明治12年）に横浜山手町に日本初の機械製氷会社 Japan Ice Company を創りましたが、2年後オランダ人に売却、その後の合併・統合を経て現在のニチレイに発展しました。

#### ウォートルスはアイルランド人

昨年出版された「銀座建築探訪」（藤森照信・増田彰久著、白揚社）によると、トーマス・ウォートルスは、実はアイルランド人であり、アイルランドの中心部にあるバー（Birr）という小さい町で1842年7月17日生まれました。当時アイルランドは英国領であったため、諸文献に「英国人」として記載されているわけです。

この解説から関心をもち、彼の故郷の歴史研究者に尋ねてみたところ、彼とその家族の概要を知らせてくれました。彼の祖父トーマスは外科医であり、父のジョンもダブリン、エディンバラ、グラスゴーで学び医学博士号をとり1842年にバーで医業を開始しました。後にヘレナ・ロビンソンという女性と結婚し、姉5人キャロライン、エリザベス、アミー、ヘレン、ルーシーが生まれた後、長男トーマス、次男アルバート、妹アデレード、三男アーネスト、妹ジョージナが生まれました。

1841年のバーの町の人口は6336人で、経済的に恵まれたウォートルス一家は富裕層の多い地区に住んでいましたが、町の大半は貧困層の住む地区でした。父ジョンは救貧院の医師になったが、折りしも1845年から1850年代初めにかけてジャガイモの病気による「アイルランド大飢饉」が続き、これは医師の家庭であったウォートルス家の家族に大きな影響を与えました。

父のジョンはトーマスがまだ14歳であった1856年に死去し、未亡人となったヘレナは子供を連れて、イングランド南東部に移住しました。トーマスの2歳上の姉ルーシーはニュージーランドに渡り一旦帰国後結婚、オーストラリアに渡りましたが、多数の水彩画を残したことから後世研究の対象となりました。

ウォートルス一家が住んでいたバーの町の「オクスマンタウン・モール」という通りは、地元の灰色の大理石を使用したジョージアン・スタイルの建物が連なっていました。石の粗い壁面は漆喰で仕上げられており、町から20kmのガレン地区で造る黄色味を帯びた煉瓦「ガレン・ブリック」はドアや窓の枠として使用されていました。



トーマス・ジェームス・ウォートルス



アルバート・ウォートルス



アーネスト・ウォートルス

## トーマス・ウォートルスの技術

先述の本での藤森照信氏の推測によると、末弟のアーネストにはドイツのフライブルク鉱山工科大学を卒業、兄トーマスも同じ大学で学んだ可能性があるとのこと。明治初期の日本ではフランス人の鉱山技師を雇っていましたが、途中でクルト・ネッターなどのドイツ人技師に切り替わります。ちょうどその時期にトーマスの弟らも来日し、ネッター体制の下で活動しました。彼らはネッターの大学の後輩にあたります。

末弟のアーネストは中小坂鉄山（群馬県）で、次弟のアルバートは高島炭鉱（長崎県）で働きました。藤森氏によると鉱山技師は、測量、金銀分析、セメント製造、煉瓦焼成、水路開削、鉄道建設、発電機設置などオールマイティであることを求められます。建築はトーマスにとっては、鉱山技術の一部であり、専門の建築技師らがお雇い外国人として入ってきたとき、離日せざるを得なかったのでしょう。

## 離日後のウォートルス兄弟の足どり

トーマスは1877年（明治10年）離日し上海に渡り、土木建築技師として活躍、その後ニュージーランドで鉱山開発に従事し、アメリカ合衆国コロラド州で鉱山開発に当たっていたアルバート、アーネストらに合流します。1891年（明治24年）デンバーにウォートルス兄弟社を設立し、デンバー駅前にある市街鉄道（当初は鉄道馬車、のちケーブル鉄道）の事務所兼車庫のビルに入居しました。

デンバーは、カリフォルニアでのゴールドラッシュの後のコロラドの鉱山開発ブームで形成された町です。兄弟はデンバーから直線で300km南西のテリユライドという鉱山町を拠点に活動しました。この町はアーネストが命名し、駅舎や構内施設も彼が設計したといわれます。

その後兄弟のうちアルバートがイングランドに戻り、残る2人がデンバーで鉱山事業を続けました。アーネストは、ベッド、バス、キッチンなどが付いた専用客車を所有し、デンバーとテリユライドを往復していました。しかし多忙で不在が続くうちに妻と疎遠になり、別居、その後妻は誤って濃い石炭酸を飲んで死亡、アーネストは精神状態が不安定になり経営の一線から退きました。翌年兄トーマスがテリユライドの鉱山の再建を図っていたときアーネストは鎮静剤の飲みすぎで死亡しました。コロラドのシルバーラッシュはその年から本格化しました。その後トーマスは1898年に肺炎で死去（享年56）し、デンバーのフェアマウント墓地にあるアーネストの墓の横に葬られました。トーマスと妻の間には4人の子供がいました。兄の死後アルバートは会社をキッチンナーという人物との共同運営にしましたが、1899年にはロンドンに移転、1901年に提携を解消し翌年に死去するまで単独経営をしました。

## ウォートルス兄弟と「アイルランド大飢饉」

19世紀半ばの「アイルランド大飢饉」は、ある意味で人為的に引き起こされた災難であったともいわれます。様々な土地使用制限からアイルランド人はジャガイモを主食にしていたが、そのイモに伝染病が蔓延し大飢饉が起こります。このような中でも英国政府は、穀物に関する市場原理主義をとり、アイルランドで生産される穀類も不在地主の利益のため輸出される状態でした。この結果、餓死者が80万人から100万人に達し、飢餓を逃れて200万人以上がアメリカ合衆国などへ移住しました。大統領を出したケネディー族の祖パトリックもこの時期に米国へ移住しました。このような時代の只中で育ったウォートルス兄弟にとっては、日本であろうと米国であろうと働く場があればどこへでも行く用意はあり、たまたまグラバーから誘われ薩摩藩に雇われ、引き続き同藩が主導した明治維新後も人脈の関係で多くの仕事を受注し、滞在し続けたということなのでしょう。更に1848年カリフォルニアでゴールドラッシュが始まり、1869年には米国横断鉄道も開通し、コロラドの鉱脈にもアクセス可能となったことから、鉱山技師の兄弟は米国を目指したのでしょう。

### 3. 廃校旧丸山小学校の保存活用の取り組み

理事長 馬場 英男（会員No.8）

平成25年12月7日（土）午前、会員と市民有志7名が参加し、旧丸山小学校校舎（昭和25（1950）建築）の清掃作業を実施しました。前会報86号で校舎の老朽化の状況をお知らせしましたが、7月7日の樹木・竹伐採に続く作業でした。すでに、窓ガラスの破損箇所はベニヤ板で仮修理、屋根の雨漏りは瓦の破損箇所の写真を市に提出した結果、市により修理が施行されました。

今後も毎月一回程度、校舎の清掃作業を継続することにしています。夏の良い時期に、グラウンドでイベントと教室での展示（内容は今後検討）を企画したいと考えています。以下、清掃作業を報告しますのでご覧ください。



埃が舞う中での清掃作業



清掃後の校舎一階部分



雨漏り修理、破損ガラスベニヤ仮修理完了

**4. 東日本大震災支援報告** **理事長 馬場 英男 (会員No.8)**

平成 23 (2011) 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災から 3 年近くになりますが、復興は遠く先が見通せません。私は別に所属する団体で陸前高田市に 2 年連続バスで出向き、被災者にお米や会員制作の陶器、マフラなどを届けるほか、現地でリンゴジュース、お菓子、グッズなどを購入し支援する活動に参加しています。また、当法人でも平成 23 年 4 月から積極的に日本赤十字社や日本ナショナルトラストに義援金をこれまで 9 回に渡り寄付しています。寄付総額は、430,507 円となりました。この内訳は、当法人からの寄付に加え、指定管理者時の赤煉瓦施設での募金箱、廿日の市での収益金の一部から支援しているものです。

公益財団法人日本ナショナルトラストは、「東日本大震災自然・文化遺産復興支援プロジェクト SEEDS OF FURUSATO」を立ち上げ、被災地の文化遺産の保存再生のため寄付を募っています。この賛同者は、荒巻貞一・赤星憲広・北川フラム・千玄室・竹下景子・辰巳琢郎・増田明美・養老孟司ほかが名を連ねています。

ぜひ、皆様もご寄付ご支援をお願いします。当法人に寄せるか、以下の振込先をお願いします。

- ゆうちょ銀行 □座番号：00130-0-417855 □座名称：日本ナショナルトラスト震災募金
- 三菱東京UFJ銀行 支店名：丸の内支店 □座名称：公益財団法人日本ナショナルトラスト震災復旧支援金 □座種別：普通 □座番号：1108049

ちなみに、この寄付は、税務課除対象となります。

平成 25 年 10 月 10 日～12 日にかけて陸前高田市に出かけ仮設住宅を訪問慰問しましたので、以下ご覧ください。



仮設陸前高田市役所に被災児童への支援金を届ける



仮設住宅にお米・マフラなど届ける



復原された一本松前で記念撮影

**5. 編集後記** **事務局**

赤煉瓦ネットワークは、平成 3 (1991) 年 10 月 12 日に発足、当倶楽部も同年 6 月 1 日に発足と同じ歩みを辿り、現在、同じ悩みを抱えています。発足当時の中心メンバーが共に市役所を退職し、体力・気力に陰りが見えてきました。

これらを解決するには、後継者の育成と新たな目標の設定が必要となります。しかし、各地の赤煉瓦の保存等に問題を抱えていた都市で、成果が上がらなかつたり、当初のような熱気を保つことが出来なくなっているのです。

当法人では、指定管理者業務を終えた時点で、原点に立ち返り、市内に現存しまだ市民に広く知られていない赤煉瓦施設に光を当てる活動を行うことを主眼に置き活動を継続することにしています。残る後継者の問題ですが、常に魅力的な活動で若者の参加を募るしか方策は見つかりません。今年も、初心を忘れずいつまでもフレッシュな気持ちで・・・。(h. b)